

# 中高生世代のための 1318Happy Zone



財団法人札幌市青少年女性活動協会 高橋 雅裕

昨年から掲載してきた「韓国健全育成活動事業特派員」レポートも最終回。今回は、中高生世代の活動拠点「1318Happy Zone」視察報告を高橋さんからいただきました。

韓国は、私にとって初めての海外であり、もちろん初めての韓国の児童館でした。仁川空港に降り立ち、韓国の空気?に感動しながらも、韓国に滞在した3日間で何と言っても忘れられないのが、イベント“폼 나는 축제(2010地域児童センター青少年フェスティバル)”で見せてくれた青少年たちの笑顔です。夏の日差しと同じくらい輝いていたのが、青少年たちとそれを支えるスタッフの姿でした。そのスタッフの配慮で、実際に“1318Happy Zone”を見学することができました。

## 1318Happy Zone

韓国における中高生世代のためのセンター“1318Happy Zone”。その名の通り13～18歳までの子どもたちを対象とした施設です。社団法人小さい愛を分かち合う会(通称ブスロギ)という団体が中心となり、民間企業と行政組織が連携して全国展開しています。韓国は日本以上に学歴至上主義であることは、報道などを通して知っていましたが、経済的な背景により貧困などの社会格差が顕著化し、社会問題となっているこの状況こそが、“1318Happy Zone”をモデル事業としてスタートさせる背景であることをあらためて実感できました。



▲ビルの2階が1318Happy Zone

今回1つの施設を拝見させてもらいました。ソウル中心部からやや離れた商店街や住宅街が並ぶ中、雑居ビルと言っていいのでしょうか、その2階のワンフロアを使って運営しているとのことでした。

30～35坪の活動スペースに入って最初に目に留まったのが図書、それも学習図書でした。所長さんの説明によると、ここに来る子どもたちの親の大半が中卒・高卒とのこと。大卒が80%以上を占める韓国では、1318Happy Zoneはまさに大学卒業を目的に明るく夢を持って過ごす場所になっているようです。

子どもたちは最初、親と一緒に来るのが多く、すなわち親の同意を得てプログラムを進めていきます。その後、中高生世代には「学力支援」「文化」「情報」「相談事業」など、目的別の多様なプログラムを提供しているとのことでした。学校との関係については、先生と話しながら進めていくことも多く、学校から紹介されて来所することも多々あるそうです。そのほか、親対象の勉強会の開催や相談への対応、また家庭訪問なども実施しているそうです。

説明の中で印象的だったのが、スタッフ層の厚みです。2～3名の職員のほか、運営サポートをする大学生ボランティアや専門家のスタッフが、子どもたちをしっかりと支えているのが印象的でした。ギターやダンスなどの多様なサークル活動もありました。「料理

サークル」では、クリスマスには地域で一人暮らしの高齢者に料理を持っていく取り組みを行っています。利用している青少年たちの家庭環境によっては、意欲がない子どもたちも多いそうです。そこで、集団の中でリーダーに指名したり、モチベーションをあげていく取り組みを行っていることを伺いました。興味を引く話の数々に、あという間のひとときでした。



▲多くの学習図書

日本の児童館が「遊びを通した育ち」であるのに対し、韓国の児童館は「学習支援を中心とした目的を持ったプログラム提供」が特徴なのではないでしょうか。

## 日本をふりかえってみて

日本の児童館はこれまで、対象が18歳までであっても、小学生の利用者が多数であり、中高生の居場所としては、あまり注目をされていませんでした。しかし、中高生の不登校やいじめの問題、せっかく高校に入学してもすぐに退学する人や就職しても長続きしない人など、生きづらさを抱えている青少年が増えている現実もあり、中高生の利用についても積極的な取り組みが広がりつつあると思います。

韓国のスタッフとの交流の中で、「日本の遊びを通しての育ち」に関心を持ち学んでいきたいと言っていました。中高生世代の居場所として課題を持ち、民間企業・行政組織と連携して全国で事業展開をしている部分は、日本も今後の中高生事業を考えるうえで参考になっていくでしょう。

説明していただいた所長から「貧困家庭にとっては、お金があれば何でもできるという思いがあります。ここでは青少年人文学に一番力を入れています。いろいろな生き方をぜひ考えてほしいと思います。それは、お金で価値を図るのではなく、お金がなくても夢を持って幸せに生きてほしいという思いからです。」という言葉をいただきました。



▲日韓スタッフで

国の違いはあれど、未来を築く青少年への思いは同じであることを確認できたとともに、これからも児童館の職員同士として輝く笑顔で「交流を続けていきたい」と思った韓国訪問でした。